
対照的な姉妹

星流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

対照的な姉妹

【Nコード】

N4562Z

【作者名】

星流

【あらすじ】

昔から、ずっと不思議だったことがある。

私達姉妹は、なぜこんなにも似ていないのだろう。

天才型でワガママ女王様の姉、咲良いさと、努力型でこき使われる平凡な妹、美月みつきの日常。

恋愛もまったり進展します。

ワガママ女王様

小さい頃から、私は不思議にずっと思っていた。

そして、高校2年生となった今でも、その疑問は消えずに…
むしろ、理不尽な遺伝子のいたずらに腹立たしささえ感じてしまう。

「美月、私の部屋にある雑誌もってきて。」

リビングのソファで携帯をいじりながら、私に向かって命令する。
長く艶のある茶髪にゆるいパーマを本日かけてきたばかりだという
私の姉、咲良。

「ベッドのそばのテーブルに置いてあるから、早くしてよね。」

現在、私は今日の授業の復習をしている。
リビングのテーブルで。

彼女の睫毛で覆われた大きな瞳は飾りなのか、それとも私が勉強していいようが関係ないのか。

：9割の確率で後者だろう。

まず、何様かと聞きたい。

「美月。」

少し強い口調で急かすお姉さまに、無意識にも頬が引きつる。
久しぶりに早く帰ってきた姉と2人きりでお留守番など、始めからいい予感はしていなかった。

けど、さすがに私も我慢の限界だった。

「さっき、コーヒー淹れてあげたでしょ！その後、せっかく淹れてあげたコーヒーが冷たくなったからって、また温めさせたのは誰よ！」

私は椅子から立って、あくまで冷静にお姉ちゃんに聞く。

「だって、猫舌なんだから。熱いコーヒー冷ましてたら、思いのほか冷めちゃったんだからしょうがないじゃない。」

こちらを見向きもせず、淡々と答える姿にまたイライラが募った。

「じゃあ、携帯の充電器をもって来させたり、お姉ちゃんの洗濯物

を干したり畳んだりしたのは誰のお願い？」

家に帰ってきて、早2時間。この間、私は勉強できていないに等しい。

すべて、彼女の命令により使われた。

「私しかないじゃない。母さんは買い物に言ってるし、お父さんは今日も夜勤だし。

そんな少し前のことも、分からなくなるくらい記憶力がないのかしら？」

…もう限界です。

鼻につくような言葉運びで、蔑まれた。

その勝ち誇った顔に欠点があれば、もう少しこの怒りは落ち着いていただろうに。

もしくは私の容姿が平凡でなければ、この敗北感は和らいだかもしれない。

力の入る拳の行き場のなさに、わざとため息をもらす。

少しだけ冷静になれた気がする。

…気のせいかもしれないけど。

そして、ある結論にたどり着いた。

自分の部屋に戻って勉強しよう。

お姉ちゃんの命令は無視。無視。何が何でも無視。

イヤホンを耳栓代わりにして、聴覚をシャットアウト。

これで、お姉ちゃんの声は聞こえない！

私は勉強道具を素早く片付けて、自分の部屋へと向かう。

つもりだったのに…。

「こんなもんしたって無駄よ。この間のテストは誰のおかげで赤点免れたのかしら？」

…いつの間にか背後に立っていたお姉ちゃんにイヤホン没収され、おまけに弱みを出された。

ええ…私の苦手科目である数学が前回のテストで90点の高得点を取れたのは、認めたくないけど、お姉ちゃんの教育のおかげ。

努力しなくちゃ覚えられない私と違って、授業さえ聞いていればテ

スト期間など必要なかった彼女の説明は、悔しいがめっちゃくちゃ分かりやすい。

「そうね、今月中ずっと私の言うとおりに動けば、来月の中間テストの成績が中の下から、上の中くらいにはなるかしら？」

「…雑誌をすぐに持ってきます」

私はまとめた勉強道具をテーブルにおいて、2階の彼女の部屋へと渋々向かうことにした。

めっちゃくちゃ嫌みな言い方だったが、留年したくはないから、しょうがない！

私は階段をのぼった。

だが、私はこの時気づいていなかった。

今日が12月1日だということを、つまり、31日間もお姉ちゃんのわがままを聞かなくてはいけないということ。

その事実気づいたのは、もう少し後の話で、すぐさま激しい後悔に襲われたのは言うまでもない。

そんな私に向かって、

「笑っちゃうくらい、単純よね。美月は。」

とムカつくくらい綺麗な微笑を浮かべて、読み終えた雑誌の片付けを私に命令した。

至福の時は放課後

幸せだあ…。

甘い香りに包まれながら、私は解放感を感じていた。

家にいるよりもゆっくりで自由な時間を過ごせるのが、学校って…
どういふことなのか聞きたい。

今日は月に2回の料理部。

本日のメニューはカップケーキである。

手軽で持ち帰りやすいため、彼氏がいる子たちの食いつきがよかった。

私はもちろん、そんな相手はいない。

だが、これでも、天才型の姉より家事能力が高い自信はある。
だてに毎日こき使われてはいない。
むしろ、それくらい誇れるものがなければ、本当に悲しくなってくる。

「よし、出来た！」

カップに生地を流し入れて、オーブンにセットする。
あとは15分待つだけだ。

「さすが、美月、手際がいい。」
しっかり者で、この部活の部長の清香きよかに誉められると、純粹に嬉しい。

「本当。毎日、朝ご飯とお弁当作ってるだけあるよねっ!!」

明るい性格で、屈託のない笑みが可愛らしい彩ちゃんあや。
ほわほわした彩ちゃんあやは私の癒やしだ。

「お母さんは朝早いからね。お姉ちゃんあやは朝起きれないから、消去法で私しか作る人いないだけだよ。」

まあ、お姉ちゃんあやは起きたとしても作る気ないんだろうけど。

正直、姉の料理姿は絵にはなりそうだが、まったく想像できない。

「美月のお姉さん、一回見たことがあるけど、めっちゃくちゃ美人だよね。」

「えっ!?! 清香ちゃん見たことあるの?」

「偶然ね。お姉さんと美月が一緒にいたときに会ったの。優しそう

なお姉さんだったよ。」

ああ、あの日は上機嫌だったからね…。

面倒くさがりではあるが、社交的なお姉ちゃんを悪く言う人は…私を含めごくわずかだ。

私自身、お姉ちゃんの本性を言わないからね。

後が怖いし、言いなりになってるなんて恥ずかしいし。

「美人なお姉さんとお買い物？」

「確か、ケーキ食べに行くって言ってたよね。」

そう、あの日は衝撃的だった。

私がお姉ちゃんの命令で作ったガトーショコラ。

それをバレンタインに、本命に渡したらしい。

そして、後日、なぜかケーキを奢ってくれた。

渡した人とうなったのかは、まったく興味なくて聞いてないけど…食べに行ったケーキはおいしかった。

「お姉さんがいるっていいな。彩は弟しか、いないもん。」

「あのね、お姉ちゃんがいたって、毎回奢ってくれるわけじゃない

よ？彩ちゃん。」

あの日がお姉ちゃんが私に何かを奢ってくれた最初で最後の日となるかもしれない。

この先の未来に、そんな幻のような夢を期待するだけ無駄なのだ。せいぜい、一緒に買い物に行っても、荷物持ちにされるのがオチだ。

その光景が簡単に思い浮かぶから、恐ろしい。

「いいなあ。うちの兄貴なんて、自分だけ遊んでばかりだよ。」

「悠希さん？」

清香のお兄さん、悠希さんは私達の2つ上で、今は大学生。

去年、同じ委員会でお世話になったが、誰にでも優しく、ノリのいい彼は、年齢関係なく友人が多かった。

1回、可愛い女性と歩いているところを見たことがある。

清香には秘密にしておきたいのか、私と目があつたとき、とても慌てていたなあ。

「美月、うちの兄貴と美月のお姉さんと交換しない？」

悠希さんとうちのワガママ女王様のお姉ちゃんじゃ、明らかに割に合わない。

「遠慮しとく。」

清香が損するから、と続けようとしたところで、オーブンが鳴った。

私はカップケーキにきちんと火が通っているか確かめるため、竹串を取りに行った。



「悠希先輩、美月ちゃんの眼中にも入ってないよね。」

「なんか、可哀想だから、美月のカップケーキを兄貴のお土産に持って帰ってあげよ…。」

「美月ちゃんも鈍いっていうか、なんていうかね。」



美味しくできた持ち帰り用の3つのカップケーキは、清香に1つ（どうしても食べたいらしく）あげた。

あとの2つは、お姉ちゃんとお母さんが食べた。

「まあまあね。」

次にカップケーキ作るときは、ココア風味にしてよね。」

いちいちムカつく感想は余計だったけど。

週末の帰り道

キンコンカンコーン

今日の授業の終了を告げるチャイムが校舎に鳴り響いた。

私の周りの人達は、早々と机の上を片付けて、いそいそと教室を出て行く。

本日、週末。

金曜日の授業は、厳しい時間割でも、明日が休みだと思うと多少の我慢も出来るものだ。

だが、現在の私の心境は正反対だ。

可能ならば、土日も授業を入れて欲しい。

休日は家にいる分、お姉ちゃんからの命令の数がハンパないのだ。

私は先週の土日进行を思い出し、更に学校に止まりたくなった。

だが、今日はそういう訳には行かないのだ。

「毎月！これから、美味しい物でも食べに行かない？」

節約家な清香が珍しく、私を誘ってくる。

私は授業中にしかかけない、黒いフレームのメガネをしまいながら、美味しい物という誘惑を振り払って断った。

「ごめん！今日、用事があるんだあ…。」

これから、私はお姉ちゃんが作る年賀状の手伝いをする事になった。
ていた。

お姉ちゃんが大学から帰ってくるまでに、

送る人の住所をパソコンに打ち込まないと私の休日は無くなってしま
う。

また、どこでこんなに知り合ってくるのかというほど、彼女の送る
相手は多い。

よく言えば社交的、悪く言えば外面そとづらがいい彼女は、面倒くさがりな
癖にこういうことは忘れないのだ。

それに加え、私も年賀状を作らないとヤバイ。

中学の時の仲がよかった友達に送るだけだが、姉のものにうわのせ上乘すれば、また結構な数になる。

機械に弱い私にとって、気が遠くなる大変な作業だ。

「あら、残念。せっかく臨時収入入ったのにな。じゃあ、また今度、誘うね!」

「うん。ごめんね。じゃあね!」

清香に手を振って、教室を後にした。

はあ…年賀状頑張って作らないと。

帰り道、私は考え事をしながら歩いて帰ることが多い。

家までの寒い帰路も、考え事をしていれば、意外と早く着くものだ。

それにしても、本当にお姉ちゃんの命令に振り回されているなあ。私。

もちろん不本意だけど…住所さえ入力すれば、私の年賀状もコピーしてくれるって言ってたし。

…ええ、それに釣られて今回の命令を遂行することになりましたとも。

だって、機械は本当にチンプンカンプンなんだもん。

文字入力くらいなんとか出来ても、コピーとか印刷とかはお手上げ状態だ。

っていうか、今月は基本的にお姉ちゃんの命令聞かないといけないからね。

成績アップのために耐える気でいたが、
今月は…まだまだ半分以上ある。

私は無意識に大きなため息をついて、とぼとぼ歩いて帰った。

予定は狂うモノ

…やっと年賀状、出せたあゝ。

私は解放感を感じ、ポストの前で一息ついた。

只今、土曜日の昼時だ。

私の当初の予定では、今頃は家で課題をやっているはずなのだ。

が、予定は昨日の夜にすべて狂った。

帰ってからすぐに取りかかった、住所の入力。

私は挫折しそうになりながらも根気よく続け、最終的に3時間費やし入力を完了した。

あくまで、私はお姉ちゃんが帰ってくるまでに終わらせたのだ。

だが、お姉ちゃんが帰ってきて、入力が終わったのを報告していたとき、

「美月ちゃん、お父さんと私の年賀状も作ってくれない？」

私よりも機械オンチなお母さんが、まさかのお願いをしてきた。

お母さんがパソコンを使うのは、お姉ちゃんからしたら勘弁してほしいだろう。

パソコンの持ち主はお姉ちゃんだからだ。

お母さんに使わせたら、データが吹っ飛ぶだけじゃなく、最悪、再起不能になるかもしれない。

そして、すぐにお父さんやお母さんの年賀状も作るようにと、ノルマが追加されたのだ。

親戚や友人、知人にとお姉ちゃん以上に年賀状を書く2人の年賀状の追加は…正直いじめだ。

最終的に文字入力の日付を越えるまでかかった。

「本当に機械に弱いわよね。私だったら、美月の半分はかからないのに。」

朝、お姉ちゃんに皮肉を言われた。

ならば、自分でやれ、と心の底から叫びたくなったが、理性を総動員させて我慢した。

成長したな…。私。

今、家に帰ってもお姉ちゃんはいない。

大学に用事があるらしく、夜まで帰ってこない。

これから、どうしようか。

そういえば、シャー芯がもう少しでなくなっちゃうんだよね。

近くの書店によって行こう。

止まっていた足を動かし、私は書店へと向かった。



家から歩いて20分で行けるこの書店は、品揃えがいい。

文房具と本を眺めているだけで、1時間は余裕に潰せる。

まだお昼ご飯を食べていないが、軽食を販売しているスペースもあり、不自由はない。

買い物は帰る間際にするのが、荷物が邪魔にならなくていい。

まず、話題の新刊コーナーを見に行こうと、歩き始めたとき、

「美月ちゃん？」

後ろから男の人の呼ぶ声がしたので、振り返った。

私より頭1個分高い身長。

清香と似ている中性的な顔立ち。

髪の毛は黒から濃いめの茶色に変わったが、優しい雰囲気は変わらない。

「悠希さん。」

清香の兄である彼はにっこりと笑い、久しぶり、と返した。

和やかなひととき

まさか、この前の話に出てきた彼に会うとは：偶然とは時に奇妙なものだ。

悠希さんは、今日は彼女さんと一緒ではないらしい。

そうでなかったら、私は彼に誘われていないし、向かい合ってカフェコーナーに座ってもいない。

ここに来るのが始めてだという彼は、とりあえず、私と同じカプチーノをオーダーした。

温かくておいしいカプチーノを飲みながら、私達は他愛もない話をしていた。

話し上手な彼の話は、いつもおもしろい。

去年、委員会で会ったときには、必ず話しかけてくれた。

ふと、そのときのことを思い出して、こんな時間が懐かしいと思えた。

だが、同時に雰囲気やちょっとした仕草に変わったなあと感じるところもある。

もちろん悪い意味ではなく、ただ、大人に近づいているんだなあと思った。

考えてみれば、悠希さんに会うのは久しぶりだ。

6月に清香の家に泊まりに行ったとき以来だろうか。

半年くらい会っていないだけで、こんなにも大人っぽく、頼もしく思えるものなのだろうか。

男の人の変化は侮れない。

それがちょっとだけ羨ましく思える。

私ももう少し身長と胸が成長して欲しかった。

スタイルのいいお姉ちゃんと並ぶと、悲しくなるのだ。

「そうだ。美月、この前のカップケーキ美味しかったよ。」

悠希さんは思い出したように、微笑みながら言った。

…カップケーキ？

私は話が分からず、少し考えを巡らせた。

ああ、もしかして、部活で作って清香にあげたあれのことかな。

「ありがとうございます。」

悠希さんはカップチーノをぐくりと一口飲んで、少し冗談っぽく愚痴を言いはじめた。

「また美月の作ったお菓子が食べたいな。」

去年はもらい放題だったのに、今年はまだカップケーキだけしか食

べてないよ。」

そりゃあ、今年から大学生になったのだから、わざわざ渡しには行けない。

そもそも、去年だって悠希さんにあげようと思っていたわけでない。何人かの女子から貰ったにも関わらず、悠希さんは委員会や帰り道でしつこく催促するのだ。

よほど、甘い物が好きなのだろう。

ならば…と思い、悠希さんに一つの提案を試してみた。

「じゃあ、明日、お家にお邪魔してもいいですか？ ババロアを作って持っていくます。」

実は、明日のおやつにババロアを作るようにお姉ちゃんから命じられていた。

お菓子づくりは趣味の領域なので、命令されなくても作ることだである。

大抵はお姉ちゃんのリクエストで、作るお菓子が決まるのだ。

清香が確かババロア好きだったし、兄妹で食べれるなら、ちょうどいい。

だが、彼は少し目を見開いたまま固まっている。

応答がない。

悠希さん、ババロアは苦手なのだろうか。

「悠希さんが嫌なら別に…。」

清香の分だけ持って行きます、と続けようとしたところで、遮られた。

「ごめんごめん。嫌じゃないよ。ちょっとびっくりしただけで。」

少し顔を赤らめて、彼は弁解した。

私は安心して、笑った。

「そうですか。じゃあ、少し多めに作るので、清香と一緒に食べてくださいね。」

清香にも後でメールで伝えておかないとね。

「…そういうことか。あ、うん。頑張って死守するよ。」

悠希さんは何故か苦笑気味に頷いて、溜め息を小さくもらした。

独り占めにしたいほど、悠希さんもババロア好きなのだろうか。

似たものの兄妹だなあ、と私はカプチーノを飲みながらこっそり笑った。

聖夜の予定

初雪が降った寒い道を新鮮に感じる。

家からゆっくり歩いて20分、私は清香の家についた。

右手には、今朝作ったババロアの入ったボックスを持っている。

味にうるさいお姉ちゃんから、おいしいと、嫌みなしの賞賛をもらったので、きっと2人も喜んでくれると思う。

チャイムを鳴らすと、清香と悠希さんがいっしょに出迎えてくれた。いくらそっくりな2人でも、こうやって並んで見るとやっぱり違うところもあるものだ。

特に今は、それがはっきりと分かる。

「いらっしやい。美月、わざわざありがとね！」

清香の目がめっちゃくちや輝いている。
待ってましたという表情だ。

いつもはお姉さんの存在な清香も、女子高生らしく甘い物には目がないのだ。

下手すれば妹のようだと、私は小さく笑った。

「ううん。これ、お待ちかねのババロアね。」

「やった！早速、切り分けてこよつと。あ、美月あがってね。」

一気にテンションが上がった清香はすぐに食べるらしく、キッチンに消えていった。

あの勢いなら、一気に全部食べてしまふかもしれない。

すらっとした長身とスマートな外見に惑わされがちだが、清香は大好きなのだ。

しかも、食べても太らない、ニキビもできないという、女子なら誰もが憧れる理想的な体質の持ち主だ。

私が作ったワンホールのババロアなんか、余裕で食べれるのだろう。

やれやれという顔している悠希さんと目が合い、お互いに吹き出した。

互いに思っていたことは同じだったようだ。

「寒かっただろ？上がって暖まってよ。」

「はい。お邪魔します。」



広々としたリビングは暖房がついていて、冷えた身体が喜ぶ。

私はふかふかのソファに座って、悠希さんが淹れてくれたカフェオレを飲んだ。

「ふう〜おいしい。」

私はため息をつくように零すと、悠希さんは小さく何かを呟いた。

小さすぎて聞こえなかったが、私は特に気にせず、悠希さんにカフェオレのお礼を言った。

「苦くないか？ミルクが足りなかったら、言ってな。」

私は苦いコーヒーが飲めないので、いつもミルクと砂糖を自分で入

れるのだ。

去年に何回かお邪魔に来たから、私の好みを覚えていてくれるのか、甘さはちょうどいい。

「大丈夫です。」

「そっか。」

彼はコーヒーを一口だけ口に含んで、少し考えたように言った。

「…あのさ、美月はクリスマス空いてる？」

クリスマス…。

イブの昼は清香と彩ちゃんと遊びに行く予定だ。

ケーキバイキングの招待券を3枚ゲットしたとのことで、彩ちゃんに誘われたのだ。

そして、夜は家族でご馳走を食べたりすることになっている。

けど、次の日、クリスマスの予定はがら空きだ。

お姉ちゃんは1日遊びに行くらいから、家で特にやることもないだろう。

「空いてますよ。」

私がそう言うと、彼の表情が一際明るいものになった。

クリスマスに何かあるのだろうか。

私が疑問に思っていると、悠希さんはにっこりと笑って言った。

「じゃあ、今日のババロアのお礼をしたいから、1日あけておいてね。」

「お礼なんて…。」

ただの趣味で、しかも姉の命令ついでに作ったのに、お礼なんて申し訳ない。

私はすぐに遠慮した。

「友達がバンドやっていて、クリスマスライブやるらしいんだけど、1人で見に行くのは淋しいんだよ。

大したお礼じゃないけど、美味しいもの奢るしさ。」

彼は少し焦ったように言ってきた。

そういう風に言われると、断れないなあ。

…決して、美味しいものに釣られたわけではない。

私は彼の誘いを受けることにした。

「分かりました。よろしくお願いします。」

彼の優しさに私は自然と頬が緩んだ。

ふと、悠希さんの彼女さんにちょっと悪いなと思った。

きっと、クリスマスは都合が悪くて一緒に行けないのだろう。

「けど、悠希さん。彼女さんがいるんですし、無闇に他の人を誘っちゃダメですよ。」

私はからかい半分、忠告半分で、彼に言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4562z/>

対照的な姉妹

2011年12月19日21時53分発行